

漢代の「楚辞」のイメージ

1、賈誼「弔屈原文」——賈誼による屈原の発見

後漢の王逸によってまとめられた『楚辞章句』は現在に残る最も古い楚辞文芸注釈書であり、王逸を遡ること前漢末に劉向が楚辞をテキストとしてまとめ、それをもとに揚雄、班固、賈逵らが注を加えていたとされる。後漢に存在した書物の名を採録する『漢書』藝文志にはこの「楚辞」の名は見えず、次のように録されている。

屈原賦二十五篇。楚懷王大夫、有列傳。

唐勒賦四篇。楚人。

宋玉賦十六篇。楚人、與唐勒並時、在屈原後也。

（『漢書』卷三十藝文志）

一般に「楚辞」の旗手とされる屈原は戦国時代に楚の懷王に仕えたと言われているが、この「屈原」の名も文献上に現れるのは、戦国時代とははるかに時代を隔てた漢代に入ってからである。瀧川亀太郎は

渡邊 登紀

『史記會注考証』の中で「愚按、屈原事跡、先秦諸書絶不録之、始見賈生弔文。史公蓋依淮南離騷傳述之、不探求其顛末、故多與楚辞不合、又與國策不合。（愚按ずるに、屈原の事跡、先秦諸書絶えて之を録せざるに、始めて賈生の弔文に見える。史公蓋し淮南の離騷傳に依りて之を述べ、其の顛末を探求せず、故に多く楚辞と合せず、又た國策と合せず。）」（卷二四屈原賈生列傳）と指摘しているように、『史記』においてはじめて「屈原」の名を文献上に認めることができる。小南一郎氏はかつてこの指摘を引用して、屈原という人物は実在した人物ではなく、生み出された人物像であろうことを述べられた⁽¹⁾。また氏は「楚辞とその注釈者たち」において、「楚辞」諸作品の編年問題の論を展開されるにあたり、文学作品としての「楚辞」と屈原伝説とを切り離して理解しようとする試みが民国時代の胡適にはじまり、廖平、何天行、朱東潤、岡村繁、David Hawkes 各氏がその立場から楚辞編年問題を論じていることについても言及し、そのうえで、「離騷」は楚辞文芸の中期の作品であり、楚辞文芸の流れ全体の中でも、もっとも優れた質を備えたもの」と述べておられる⁽²⁾。

だが、これから本論で述べようとすることは、屈原という人物の詳細でも楚辭諸作品の編年問題でもなく、賈誼によつて書かれた「弔屈原文」が屈原に関するおそらく最古の記述であるというその事実についてであり、中原における楚辭文藝の受容の過程である。屈原に関する言及は『史記』屈原賈生列傳が残存するおそらく最古の史料として重視されてきたが、その『史記』に先んじて賈誼「弔屈原文」が屈原について言及しているという事実について今一度考えてみる必要があるだろう⁽³⁾。

「弔屈原文」

共承嘉惠兮、俟罪長沙。側聞屈原兮、自沈汨羅。造託湘流兮、敬弔先生。遭世罔極兮、乃殞厥身。嗚呼哀哉、逢時不祥。鸞鳳伏竄兮、鴟梟翱翔。闢茸尊顯兮、讒諛得志。賢聖逆曳兮、方正倒植。世謂伯夷貪兮、謂盜跖廉。莫邪為頓兮、鉛刀為銛。吁嗟嚶嚶兮、生之無故。幹棄周鼎兮、寶康瓠。騰駕罷牛兮、騶蹇驢。驥垂兩耳兮、服鹽車。章甫薦履兮、漸不可久。嗟苦先生兮、獨離此咎。

訊曰、已矣、國其莫我知、獨堙鬱兮其誰語。鳳漂漂其高遶兮、夫固自縮而遠去。襲九淵之神龍兮、沕深潛以自珍。彌融爚以隱處兮、夫豈從螳與蛭螾。所貴聖人之神德兮、遠濁世而自藏。使騏驥可得係羈兮、豈云異夫犬羊。般紛紛其離此尤兮、亦夫子之辜也。睇九州而相其君兮、何必懷此都也。鳳皇翔于千仞之上兮、覽惠輝而下之。見細德之險「徵」兮、搖增翮而去之。彼尋常之汙瀆兮、豈能容夫吞舟之魚。橫江湖之鱣鯨兮、固將制於蟻螻。

(共しく嘉惠を承け、罪を長沙に俟つ。側かに聞く屈原、自ら汨羅に沈むと。造りて湘流に託し、敬んで先生を弔う。世の罔極に遭い、乃ち厥の身を殞せり。嗚呼哀しいかな、時の不祥に逢う。鸞鳳は伏竄し、鴟梟は翱翔す。闢茸は尊顯せられ、讒諛は志を得。賢聖は逆曳せられ、方正は倒植す。世に伯夷を貧と謂い、盜跖は廉と為すと謂い、莫邪を頓と為し、鉛刀を銛と為す。吁嗟嚶嚶たり、生の故無き。周鼎を幹棄して、康瓠を寶とす。罷牛を騰駕して、蹇驢を騶にす。驥は兩耳を垂れて、鹽車に服ふ。章甫を履に薦き、漸く久しかるべからず。嗟苦しきかな先生、獨り此の咎に離う。

訊に曰はく、已んぬるかな、國其れ我を知る莫し、獨り堙鬱として其れ誰にか語らん。鳳は漂漂として其れ高く遶ぎ、夫れ固より自ら縮みて遠く去る。九淵を襲ぬるの神龍、沕として深く潛み以て自ら珍となす。彌融爚以て隱處し、夫れ豈に螳と蛭螾に従わんや。貴ぶ所は聖人の神德、濁世に遠ざかりて自ら藏る。騏驥をして係ぎて羈すを得べからしむは、豈に夫れ犬羊に異なると云わんや。般紛紛として其れ此の尤に離うは、亦た夫子の辜なるか。九州を睇て其の君を相けて、何ぞ必ず此の都を懷はんや。鳳皇千仞の上を翔り、惠輝を覽て之に下る。細德の險「徵」を見て、搖增翮して之を去る。彼の尋常の汙瀆、豈に能く夫の吞舟の魚を容れんや。江湖に横たわる鱣鯨、固より將に蟻螻に制せられんや。)

〔『史記』卷八四屈原賈生列傳〕

まず形式の面から述べると、この作品では「楚辞」の特色であるとされる助字の「兮」字が全篇を通して多用されている。また、「訊曰」の後に続く「已矣、國其莫我知」は、「離騷」の「乱曰、已矣、國亡人莫我知也」の句を彷彿させ、ここは明らかに「離騷」の乱辞を踏まえたものであると言つてよいだろう。また、その内容は「世の罔極に遭」つて命を落とすことになった屈原の不遇と、「時の不祥に逢」つて左遷されて長沙傅となつた賈誼自身の境遇とを重ねて嘆くものであり、作品の随所に鳥獸の比喩を多く交えるという修辭がほどこされている。

ところで、少し話題がそれるが『文選』には賈誼の「弔屈原文」のほか、顔延之の「祭屈原文」が収録されている。顔延之は劉宋の文人であり、前漢はじめの賈誼とは約六百年と時代を隔てているわけではあるが、この二作品を比較すると賈誼「弔屈原文」におけるある現象（あるいは特徴）が顕著に浮かび上がってくるのである。

「祭屈原文」

惟有宋五年月日、湘州刺史吳郡張邵。恭承帝命、建旗舊楚、訪懷沙之淵、得捐珮之浦、弭節羅潭、艤舟汨渚、乃遣戶曹掾某、敬祭故楚三閭大夫屈原君之靈。

蘭薰而摧、玉纈則折、物忌堅芳、人諱明潔、曰若先生、逢辰之缺、溫風怠時、飛霜急節、羸辛遘紛、昭懷不端、謀折儀尚、貞蔑椒蘭、身絕郢闕、迹遍湘干、比物荃蓀、連類龍鸞、聲溢金石、志華日月、如彼樹芳、實穎實發、望汨心歎、瞻羅思越、藉用可塵、昭忠難闕。

（惟れ有宋の五年月日、湘州刺史吳郡の張邵、恭しく帝命を承け、旗を舊楚に建つ、懷沙の淵を訪れ、捐珮の浦を得、節を羅潭に弭め、舟を汨渚に艤す。乃ち戶曹掾某を遣わし、敬みて故の楚の三閭大夫屈原君の靈を祭らしむ。

蘭は薰しくして摧け、玉は纈にして則ち折る。物は堅芳を忌み、人は明潔を諱む。曰に先生の若き、辰の缺くるに逢う。溫風は時を怠り、飛霜は節を急にす。羸辛紛を遘え、昭懷は端しからず。謀は儀尚に折かれ、貞は椒蘭に蔑にさる。身は郢闕に絶ち、迹は湘干に遍し。物を荃蓀に比し、類を龍鸞に連ぬ。聲は金石に溢れ、志は日月より華く。彼の芳を樹うるが若く、實に穎で實に發く。汨に望んで心は歎み、羅を瞻て思ひ越ゆ。藉用は塵すべきも、昭忠は闕き難し。）

（『文選』卷六〇）

顔延之「祭屈原文」は、湘州刺史として楚の地に赴任した張邵の依頼によって制作された祭文である。この作品は「楚辞」に関連する語彙が多く用いられている。例えば、屈原が自殺を図った汨羅の地を意味する「羅潭」「汨渚」、あるいは「望汨」「瞻羅」、屈原の役職を示す「楚三閭大夫」、屈原に関連する人物を示す「昭懷（昭王・懷王）」「儀尚（張儀・靳尚）」「椒蘭（子椒・子蘭）」、また「郢闕」といった地名など、屈原の故事にまつわる固有名詞のほか、楚辞諸作品に関連する「懷沙」や「捐珮」といった語が用いられている。さらに、楚辞諸作品の特徴として挙げられることの多い香草表現が作中に存在していることも注意すべき点である。例えば、「蘭薰而摧、玉纈則折」では香

草と玉の対句が気高いものの比喩として用いられ、続いて「物忌堅芳、人諱明潔」として「堅芳」すなわち玉の堅さと香草の芳しさという美質ゆえに人から疎まれてしまうことについて述べている。また「比物荃蓀、連類龍鸞」の対句では屈原が自身を香草と龍や鸞（鳳凰の一種）に喩えたことについて触れ、「如彼樹芳、實穎實發」では前の二句を受けて、「聲（名声）」と「志」を香草に喩えている。

楚辭諸作品にはしばしば香草表現が見られ、例えば「離騷」においては「扈江離與辟芷兮、紉秋蘭以爲佩（江離と辟芷とを扈り、秋蘭を紉いで以て佩と爲す）」「朝搴阰之木蘭兮、夕攬洲之宿莽（朝に阰の木蘭を搴り、夕に洲の宿莽を攬る）」「余既滋蘭之九畹兮、又樹蕙之百畝（余既に蘭を滋うるること九畹に、又蕙を樹うるること百畝なり）」「朝飲木蘭之墜露兮、夕餐秋菊之落英（朝に木蘭墜露を飲み、夕に秋菊の落英を餐う）」などその例は枚挙に暇が無く、このことはいま改めて指摘することでもないだろう。香草が「楚辭」文藝を構成する重要な要素であるということは、「楚辭」に対する一般的な理解と言える。

しかし、先に述べた賈誼「弔屈原賦」では、その香草が作中には一切登場していない。もう一度「弔屈原文」を見直せば分かることであるが、あるのは作品全体にちりばめられた鳥獣の描写である。例えば、「鸞鳳伏竄兮、鴟梟翱翔」の「鸞鳳」「鴟梟」、「騰駕罷牛兮騭蹇驢、驥垂兩耳兮服鹽車」の「罷牛」「蹇驢」「驥」、「鳳漂漂其高遶兮」の「鳳」、「襲九洲之神龍兮」の「神龍」、「彌融爚以隱處兮」の「融爚」、「夫豈從蠹與蛭螾」の「蠹」「蛭螾」、「使騏驥可得係羈兮」の「騏驥」、「豈云異夫犬羊」の「犬羊」、「鳳皇翔于千仞之上兮」の「鳳皇」、「豈能容

夫舂舟之魚」の「魚」、「橫江湖之鱣鯨兮」の「鱣鯨」、「固將制於蟻虻」の「蟻虻」と、作品全体に鳥獣がちりばめられている。「弔屈原文」の作中に香草を示す語句が存在せず、代わりに鳥獣が多く登場しているこの現象から一体何が考えられるであろうか。

賈誼を「弔屈原文」において単に屈原を弔う旨を述べただけではなく、その本文を屈原の作とされる「離騷」に模していたことは、「兮」字や「離騷」の句を引用した乱辭の存在から十分に窺い知ることが出来る。そして、作品全篇に散りばめられているこの鳥獣の描写もまた「離騷」を模した結果であるのではないだろうか。後世の我々にとつて「離騷らしさ」「楚辭らしさ」を考えると、先ほどの顔延之に同じく香草表現は大きな存在感を持っているだろう。だが、賈誼にとつては最初から自明の存在としてそこにあるものではなく、何を「らしさ」として受容するかは受容する側に委ねられたいわば可塑的なものである。賈誼が屈原という人物の伝承および「離騷」をはじめとした「楚辭」文芸を知ったとき、賈誼はたして何を「楚辭らしさ」として受け止めたのであろうか。

2、「楚辭らしさ」としての香草表現

賈誼「弔屈原文」と顔延之「祭屈原文」を比較した際に、賈誼「弔屈原文」には香草表現が一切見られず、鳥獣の描写が繰り返し描かれているという特徴が浮かび上がってくるについて述べてきた。

この要因について考えると、次のように推論できる。賈誼が「離騷」全篇にちりばめられた香草表現から「離騷らしさ」として受け止めたのは、香草表現そのものではなく、作品全篇に何かの描写を散りばめるといふ修辭であつたのではないかと。賈誼にとつての「離騷らしさ」がこの修辭にあつたからこそ、「弔屈原文」には鳥獸の描写を全篇に散りばめるといふ修辭がほどこされたと考えられないだろうか。もちろん、「弔屈原文」の作品中に香草表現が見られないことが、賈誼が香草表現を「離騷」の特徴として享受してはいないということになるわけではない。作品を読んで何かを特徴として受容することとその作者の弔文を書くことは、別の行為である。しかし、「離騷」を模す意図が見られる「弔屈原文」において、鳥獸を用いた表現が「弔屈原文」の作品の随所に用いられているということは、賈誼がより「離騷らしさ」を見出したのは香草そのものではなく、その修辭技法であつたと言ふことが出来るのではないだろうか。

賈誼が「弔屈原文」を書いた時点で香草表現そのものを「離騷らしさ」としては認めていなかったとすれば、香草表現はいつから「離騷らしさ」あるいは「楚辭らしさ」としての地位を獲得したのであろうか。賈誼「弔屈原文」以降の楚辭文芸における香草表現に対する反応について時代を追つて見ていくことで、その概観を見出すことが出来るだろう。

賈誼には「弔屈原文」のほかに「鵬鳥賦」といふ作品が残されている。この「鵬鳥賦」はその題が示すがごとく鵬鳥を中心に描く作品で、その序文において次のように語っている。

誼為長沙王傳。三年有鵬鳥、飛入誼舍、止於坐隅。鵬似鵠、不祥鳥也。誼既以謫居長沙。長沙卑濕。誼自傷悼、以為壽不得長。適為賦以自廣、其辭曰：

（誼 長沙王の傳と為る。三年にして鵬鳥有り、飛びて誼の舍に入り、坐隅に止る。鵬は鵠に似、不祥の鳥なり。誼は既に謫せられたるを以て長沙に居る。長沙は卑濕なり。誼自ら傷悼して、以て為へらく壽長きを得じ、と。適ち賦を為りて以て自ら廣む。其の辭に曰はく：）

（『文選』卷十三）

いま序文のみを引用したが、「鵬鳥賦」は、長沙王傳となつた賈誼のもとに不吉な鳥である鵬鳥が訪れてきた出来事を詠んだ作品で、序文本文を含めて作中には香草表現は見られず、「鵬鳥」、まさに鳥のみに焦点を当てている。この「鵬鳥賦」および前述の「弔屈原文」から、賈誼にとつて「楚」といふ土地のイメージは鳥と強く結びつけられているものであつたと考えられる。

さて次に賈誼よりおよそ三十年のちに生まれた淮南王劉安の「招隱士」を見てみよう。

「招隱士」

桂樹叢生兮山之幽 偃蹇連蜷兮枝相繚 山氣寵從兮石嵯峨 谿谷
嶄巖兮水曾波 猿狖羣嘯兮虎豹嘯 攀援桂枝兮聊淹留

王孫遊兮不歸 春草生兮萋萋 歲暮兮不自聊 蟋蟀鳴兮啾啾 塊
兮軋山曲 心淹留兮惘恍忽 罔兮沕 憶兮栗 虎豹穴 叢薄深
林兮人上慄 嶽岑碣磈兮 礧礧磈磈 樹輪相糾兮林木茂飢 青莎
雜樹兮蘋草薺靡 白鹿麀麀兮或騰或倚 狀兒嶮嶮兮峨峨 淒淒兮
漣漣 獼猴兮熊羆 慕類兮以悲
攀援桂枝兮聊淹留 虎豹鬬兮熊羆咆 禽獸駭兮亡其曹 王孫兮歸
來 山中兮不可以久留

(桂樹叢生せり山の幽 偃蹇連蜷として枝相繚う 山氣籠從とし
て石嵯峨たり 谿谷嶄巖として水波を曾ぬ 猿狖羣嘯して虎豹
は嗥ゆ 桂枝を攀援して聊か淹留す 王孫遊んで歸らず 春草生
じて萋萋たり 歲暮れて自ら聊んぜず 蟋蟀鳴きて啾啾たり 塊
として軋たり山は曲隤す 心は淹留して惘として恍忽たり 罔と
して沕たり 憶として栗たり 虎豹の穴 叢薄と深林と人は上り
て慄る 嶽岑碣磈として 礧礧磈磈たり 樹輪相糾い林木茂飢た
り 青莎樹に雜り蘋草薺靡たり 白鹿と麀麀たり或いは騰り或い
は倚る 狀兒は嶮嶮として峨峨たり 淒淒として漣漣たり 獼猴
と熊羆とありて 類を慕ひて以て悲しむ 桂枝を攀援して聊か淹
留す 虎豹は鬬い熊羆は咆ゆ 禽獸は駭きて其の曹を亡う 王孫
よ歸り來たれ 山中は以て久しく留るべからず)

(「楚辭補注」)

『淮南子』の編者である淮南王劉安の「招隱士」詩は、後漢の王逸
が注した『楚辭章句』に収められている。冒頭「桂樹叢生兮山之幽」と、

鬱蒼と茂った「桂樹」の描写から始まり、生い茂る植物が作中に多く
描き出されている。王逸がこの「桂樹」に「桂樹芬香、以興屈原之忠
良也(桂樹芬香以て屈原の忠良を興するなり)」と注しているように
桂樹は香草に類される植物である。この「桂樹」に関する描写のほか、
「春草生兮萋萋」の「春草」、「青莎雜樹兮蘋草薺靡」の「青莎」「蘋草」
といった植物が描かれている。その一方で、「虎豹」「白鹿」「獼猴」「熊
羆」など、山林に生息する様々な鳥獣もこの「招隱士」に登場してい
ることは看過できない。

時代を後漢に下ると、王逸は「離騷」の序において次のように述べ
ている。

《離騷》之文、依《詩》取興、引類譬諭。故善鳥香草、以配忠貞、
惡禽臭物、以比讒佞。靈脩美人、以媲於君。

「離騷」の文、「詩」に依りて興を取り、類を引きて諭を譬ゆ。
故に善鳥香草、以て忠貞に配す。惡禽臭物、以て讒佞に比す。靈
脩美人、以て君に媲す。

(「楚辭章句」「離騷經」王逸序)

王逸はここで、「離騷」の特徴は『詩經』に由来する「興」すなわ
ち比喩であり、鳥と香草(あるいは匂い草)そして美人(あるいは靈
脩)がその代表的な比喩であると明言している。「楚辭」に関する最
も古い注であるこの王逸の発言が、後の「楚辭」受容に多大な影響を
与えていることは言うまでもないことであるが、ここでも「離騷」の

特徴として香草表現のみを取り上げるのではなく、鳥・香草・美人が「離騷」の三要素として並列に指摘されていることに注意せねばならない。

以上、概略ではあるが「楚辞」に関連する作品から「楚辞らしさ」がどのように受容されていたかについて見てきた。ここで、これまで例に挙げてきた作品を時代順に整理してみよう。前漢の初めに賈誼は「弔屈原文」に鳥獣の描写を多く用い、続いて淮南王が「招隠士」に植物と鳥獣を多く登場させた。さらに王逸は「離騷序」で「離騷」の文の特徴として鳥と香草および美人を比喻に用いていると指摘し、それからさらに時代を下った劉宋の顔延之は「祭屈原文」の作品中で直接あるいは間接表現を含め香草に関わる表現を全編に用いる一方で、鳥獣についてはわずかに「比物荃蓀，連類龍鸞」として屈原がわが身を香草と龍や鸞（鳳凰の一種）に喩えたと言及するのみである。

ここまで挙げてきた諸作品群は、香草表現が「離騷らしさ」また「楚辞らしさ」として定着していく過程として見る事が出来るのではないだろうか。すなわち「離騷らしさ」「楚辞らしさ」とは絶対的なものではなく、徐々に形成されていくものであり、また後に「らしさ」として受容するのは既に形成された先入観・固定概念の影響が大きかったと考えられる。香草表現が「楚辞」の特徴であると聞いてから「楚辞」に関連する作品を読んで「楚辞」を模倣した作品を作ることとは、それを知らずに読んで「楚辞」的な作品を作ろうとすることとは、自ずとその結果も異なってくるはずである。

賈誼が屈原について初めて言及したことを考慮にいれるならば、賈

誼の時代にはいまだ香草表現が「離騷らしさ」「楚辞らしさ」として定型化されてはいなかった可能性は高いだろう。長沙という未知の地に左遷された賈誼にとつて、当地の文学文芸に対して抱いたイメージは香草ではなく鳥獣であり、その鳥獣を作品の随所にもたらす修辞であったのであろう。その後、賈誼から淮南王劉安そして王逸と時代の経過とともに、香草表現が「楚辞らしさ」として認識され、「らしさ」として定型化されていったのである。

3、中原における「楚辞」の受容過程

賈誼の時代から淮南王そして王逸と時代の経過とともに、香草表現が「楚辞らしさ」として見出され認識されていくように、漢から後漢の時代はまさに楚辞文芸が漢王朝（中原）に浸透していく時代であると言えるだろう。前章では香草表現をめぐって、漢から後漢にかけてを見てきたが、この章では『史記』『漢書』の比較から「楚辞」受容の様相について概観していこう。

司馬遷『史記』は前漢の武帝期すなわち紀元前九七年に、班固の『漢書』は後漢初期すなわち紀元八〇年にそれぞれ成っている。司馬遷は「招隠士」の作者である淮南王劉安と同時代人であり、一方、後漢の班固と王逸では卒年がおおよそ五十年、班固のほうが早い。漢の武帝期に成立した『史記』と後漢初期に成立した『漢書』の間に、どのような楚辞文芸浸透のいわゆるタイムラグを見出すことができるであろうか。

『史記』『漢書』における「楚辭」「屈原」に関する記述が見られる箇所は管見の限りでは次の表の通りである。

『史記』	『漢書』
屈原（卷八四屈原賈生傳）	
賈誼（卷八四屈原賈生傳）	賈誼（卷四八屈原賈生傳）
朱買臣（卷一二二酷吏列傳）	朱買臣（卷六四上朱買臣傳）
	淮南王劉安
	（卷四四淮南衡山濟北王傳）
太史公（卷一三〇太史公自序）	司馬遷（卷六二司馬遷傳）
	王褒・九江被公（卷六四上王褒傳）
	揚雄（卷八七上揚雄傳）
（卷二九貨殖列傳）△	（卷二八地理志）
	（卷三〇藝文志）

右の表は「楚辭」に関する記述を、時代順に並べ直したものである。「屈原」の語を記載する最も古いテキストが「弔屈原文」であることは既に述べてきた通りであるが、『史記』では賈誼とその賈誼を取り上げた司馬遷の太史公自序を除くと、「楚辭」にまつわる記述は朱買臣の傳のみである。『漢書』では司馬遷の同時代人である淮南王が加わり、さらに司馬遷以降すなわち『史記』以降では、「能誦楚辭」する九江被公を召したという王褒、また「反離騷」を著したという揚雄が列に加わっている。絶対数こそ少ないが、『史記』より『漢書』において「楚辭」に関する記述が増えていることは、「楚辭」の普及の

過程であるということができ、また両書において「楚辭」に関する記述の絶対数そのものが少ないことは当時の中原文化にとって「楚辭」はまだまだマイノリティであったことを示していると言えるだろう。

同内容を扱う際にも『史記』『漢書』間には相違点が存在する。例えば、これまで述べてきた賈誼傳および賈誼「弔屈原文」に焦点を絞ると、『史記』『漢書』の間で、この作品をどのように位置づけるかという両書の視点の相違が存在する。「弔屈原文」が『史記』のほか『漢書』『文選』などに収められていることは先に述べた通りであり、これらのテキスト間において「兮」字の位置といった異同が存在するが、最も大きな異同はテキスト本文に付された前文の存在である。『史記』『漢書』は賈誼が左遷によつて長沙王太傅を命じられたことを述べたあと、それぞれ次のように続けている。

賈生既辭往行、聞長沙卑溼。自以壽不得長、又以適去、意不自得。及渡湘水、為賦以弔屈原。
（賈生既に辭して往行し、長沙の卑溼なるを聞く。自ら以て壽の長を得ず、又以て適き去る。意自ら得ず。湘水を渡るに及びて、賦を為りて以て屈原を弔う。）

（『史記』 卷八四屈原賈生列傳）

誼既以適去、意不自得、及度湘水、為賦以弔屈原。屈原、楚賢臣也、被讒放逐、作離騷賦、其終篇曰「已矣、國亡人莫我知也。」遂自投江而死。誼追傷之、因以自論。其辭曰、…

(誼既に以て適き去り、意自ら得ざるに、湘水を度るに及びて、賦を為りて以て屈原を弔う。屈原は楚の賢臣なり。讒して放逐せられ、離騷賦を作り、其の終篇に曰はく「已んぬるかな、國亡びて人我を知るもの莫きなり」と。遂に自ら江に投して死す。誼之を追傷し、因りて以て自ら論ゆ。其の辭に曰はく、…)

〔漢書〕卷四八賈誼傳

両書の相違点は大きく二点、(1)『史記』に見られた長沙に対する嫌悪感を思わせる「長沙卑溼」の語は『漢書』においては削られていること、(2)『漢書』では、屈原が楚から追放されてその嘆きを「離騷」に詠ったのだとし、また賈誼が自身を屈原に重ねていることを明言していることになるだろう⁽⁵⁾。

『史記』は「太史公自序」などにおいて屈原の作である「離騷」を読んだことなどについて言及するものの、また屈原本傳においては「懷沙賦」の全文引用はあるが「離騷」については作品の紹介のみに終始している⁽⁶⁾。一方、『漢書』は「弔屈原文」の制作について賈誼が屈原に自己投影をしているという積極的な動機付けを行い、「弔屈原文」と重複する「離騷」の一文を引用することでそれを実証しようとしていることが分かる。これらの比較から、『史記』は中原では当時あまり知られていなかったであろう屈原を賈誼を通して紹介し、『漢書』は意図的に「弔屈原文」をより「離騷」に接近したところに位置づけようとしていることが推察できるのでないだろうか。

続いて両書の貨殖列傳と地理志を見てみよう。次に、『史記』貨殖列傳(卷一二九)の楚地域に関する記述は次の通りである。

與閩中、干越雜俗、故南楚好辭、巧說少信。江南卑溼、丈夫早夭。多竹木。

と「好辭(辭を好む)」とあるのみで、「楚辭」とは述べてはいない。一方、『漢書』では地理志の「楚地」の項で、「楚辭」についての見解が述べられているので、ここに引用しよう。

始楚賢臣屈原被讒放流、作離騷諸賦以自傷悼。後有宋玉唐勒之屬慕而述之、皆以顯名。漢興、高祖王兄子濞於吳、招致天下之娛游子弟、枚乘・鄒陽・嚴夫子之徒興於文、景之際。而淮南王安亦都壽春、招賓客著書。而吳有嚴助・朱賈臣、貴顯漢朝、文辭並發、故世傳楚辭。其失巧而少信。初淮南王異國中民家有女者、以待游士而妻之、故至今多女而少男。本吳粵與楚接比、數相并兼、故民俗略同。

(始め楚の賢臣屈原讒して放流せられ、離騷諸賦を作りて以て自ら傷悼す。後に宋玉・唐勒の屬有るに、慕いて之を述べ、皆以て名を顯す。漢興りて、高祖兄の子濞を吳に王たらしめ、天下の娛游たる子弟を招き致し、枚乘・鄒陽・嚴夫子之徒文・景の際に興る。而して淮南王安も亦た壽春に都し、賓客を招きて書を著す。而して吳に嚴助・朱賈臣有りて、漢朝に貴顯し、文辭並びに

發し、故に世に楚辭を傳う。其の失巧にして信少なし。初め淮南王國中の民家に女有る者を異とし、以て游士を待して之に妻す。故に今に至りて女多く男少なし。本もと吳粵と楚と接比し、數しば相い并わせ兼ね。故に民俗略は同じなり。」

〔漢書〕卷二八地理志下

屈原の「離騷」にはじまった「楚辭」文学は呉楚地方の文人らが漢の宮廷に出入りすることによって「漢朝」に広まったということを述べている。つまりは「楚辭」は一地域の地方文学であり、宮廷に取り入れられたことで世に広まったということである。『史記』では「南楚好辭」と「楚辭」という固有名詞は存在せず一般名詞としての「辭」でしかなかったのに対して、『漢書』においては「故世傳楚辭」と固有名詞を獲得しつつある。また対象となる地域について、『史記』では「南楚」として「楚」地域をさらに細分化しているのに対して、『漢書』では「呉」の嚴助・朱買臣によって広められた文学が「楚辭」であり、「呉」と「楚」はほぼ同じであるとして、呉と楚を同一視していることは看過できない。このことから、少なくとも「楚辭」の「楚」については、厳密な地域定義があつて「楚辭」と名付けられたわけではなく、むしろ「漢ではない」「南方の」といった曖昧な地域定義から名付けられていると考えるのがよいだろう⁷⁾。中原での「楚辭」受容は『史記』と『漢書』成立の間がまさにその過渡期であり、この過程で「楚」地域の「辭」から「楚辭」へ、一般名詞の「辭」から固有名詞の「楚辭」が成立していったのであろう。

4、結び

ここまで、賈誼「弔屈原文」が中原における楚辭文芸の嚆矢であり、その中原において楚辭文芸は最初から香草表現という特徴が特徴として認識されていなかったこと、香草表現は段階を経て「楚辭らしさ」として受容されていったことについて述べてきた。また、その受容の段階は『史記』と『漢書』の成立の間と重なり、『史記』『漢書』の両書の間でも「楚辭」に対するイメージに相違が生じていることについても指摘を行ってきた。

中原における楚辭文芸の普及の契機が、賈誼の「弔屈原文」を収録し、賈誼傳に合わせる形で屈原傳を設けた司馬遷の『史記』であるのか、それとも司馬遷個人ではなく同時代の流行によるものであるのかは、現時点ではどちらであると断言することは出来ない。だが少なくとも、中原での楚辭文芸の最初の紹介者が賈誼であつた可能性は極めて高く、この賈誼の存在は楚辭文芸を考える際にもっと注目されてよいだろう。さらに香草表現が最初から「離騷らしさ」「楚辭らしさ」として認識されていたわけではなかったように、「楚辭」そのものも自明の存在などではなく、「楚辭」という名も中原によって与えられた名称であると考えられる。後世の我々が知る楚辭文芸は、賈誼によって取り上げられた屈原伝説と「離騷」を契機として中原で受容されることになり、その受容の段階を経て初めて「楚辭」という名が中原で認識されるようになったのであろう。

注

- (1) 小南一郎『楚辞』（筑摩書房、1973、pp218）
- (2) 小南一郎『楚辞文藝の編年』（『楚辞とその注釈者たち』所収、朋友書店、2003、pp33-34）
- (3) この「弔屈原文」は、『史記』のほか『漢書』賈誼傳および『文選』卷六〇、また節録ではあるが『藝文類聚』卷四〇に収録されている。つまり、『史記』の「弔屈原文」が現在見ることが出来る最も古いテクストといえる。
- (4) 『文心雕龍』（詮賦）は賦について「賦者鋪也」と定義し、賈誼を賦の嚆矢としている。賈誼が鳥に着目していたことは辞賦というジャンルを考えるにあたって注目に値するが、この件については別稿に譲りたい。
- (5) この『漢書』に載せられた前文は『文選』には「弔屈原文」の「序」として収録されているが、「弔屈原文」に「序」がもともと付されていたのかどうか、その「序」が賈誼の手によるものであるのかどうかについては今は触れず、『史記』と『漢書』の相違を示すにとどめておく。
- (6) 『史記』卷八四屈原賈生傳「屈平疾王聽之不聰也，諛諂之蔽明也，邪曲之害公也，方正之不容也，故憂愁幽思而作離騷。離騷者，猶離憂也。……屈平之作離騷，蓋自怨生也。國風好色而不淫，小雅怨誹而不亂。……」
- (7) 木津祐子「陸機と「楚」」（『中国文学報』第53冊、pp33、34）

〔附〕 本稿は、台湾輔仁大学第六屆先秦兩漢學術國際研究生論文發表會（台北、二〇〇八年十一月二十二日）における発表原稿の日本語訳である。